こだま

第175号
2011.7

ISSN 0915-8782

金沢大学附属図書館報 “こだま”
http://www.lib.kanazawa-u.ac.jp

CONTENTS

巻頭対談 ……1
環境学コレクションOPEN! ……4
KULiC-α活動報告 ……5
明後日朝顔プロジェクト2011金沢 ……6
とぼらニュース ……6
金大生のための読書案内 ……7
トピックス ……8

巻頭対談

学びの空間は図書館をどう変えるか？

中央図書館にラーニング･コモンズKULiC-αが出来て1年あまり。設計･監修をして頂いた山内祐平東京大学准教授が来館されたのを機会に，柴田附属図書館長との対談を行いました。話は学習空間の話，図書館員の専門性から渋い大人の集まるバーの話まで…多岐に及びました。そのエッセンスをご紹介しましょう。場所は3階オープンスタジオです。

司会：山田政寛（大学教育開発･支援センター准教授）

柴田 正良（しばた まさよし）

附属図書館長，人文学類長，人間社会研究域教授。
専門は，心の哲学，行為論，倫理学。

山内 祐平（やまうち ゆうへい）

東京大学大学院情報学環学際情報学府准教授。
専門は，学習環境デザイン。

劇的ビフォーアフター 空間は人の思考を変えるか？

司会●1年半ぶりに見学されていかがでしたか？

山内●劇的に変わりましたね。前に来たときは現在のカフェ付近はシーンとした感じでしたが，今日は感動しました。同じ図書館だろうか？と思いました。人の数が全然違います。毎日見ていると分からないと思いますが，ビフォーとアフターで劇的な変化です。

柴田●使い勝手やセンスも良いですね。コラボスタジオを一度使うと，普通の教室とは違うと感じます。ところで，ちょっと分からないのですが，空間や道具は，人の思考をどれくらい変えるものでしょうか。「心地良い」「リラックスできる」といったことは，学習効果やアイデアの良さに結び付くのでしょうか？

山内●いきなり本質を突く質問ですね。ロジック的には「風が吹けば桶屋がもうかる」式のところがあって，「人が集まり，コミュニティができ…その中からアイデアが出る」といったいくつもの要因が入ります。箱モノだけを作っても，魂が入らないとダメですね。この空間にどういう人に集ってほしいのか，どういうことに起きて欲しいのかを読んでおくことが必要です。ただし，予想を超えた，思いもよらない出会いが出てくるのも面白いところです。

柴田●この点については，ブックラウンジで研究発表が行われた時に面白いことを感じました。我々の

世代だと，研究発表は，閉じられた空間で雑音をシャットアウトして，聞きたい人が集中して聞くのが一般的だと思ってしまいますが，カフェでやると，聞きたい人とあまり聞きたくない人がなだらかに連なってきます。このことはマイナス面かと思っていましたが，大道芸を見るような感じで，全体でイベントを共有するという形が出来ていたのは新鮮な驚きでした。

山内●学習共同体の構造を可視化した形になっていますね。コミットの度合いが空間中に可視化されています。

柴田●いろいろな人がいるのを排除してない，そういう構造の方が良いのかもしれません。ブックラウンジの壁面をギャラリーにすることも思いつきましたが，そのことによっても新しく人を引き寄せることが出来ました。空間の持つ，人を惹きつける力の面白さを経験した1年間でした。

スタジオ型教室での協調学習

山内●話は変わりますが，スタジオ型教室は，使える先生と使えない先生がいます。使えるのは部屋の中を自由に歩き回れる人。使えない先生は前方から動けない人です。

柴田●それは個性でしょうか？

山内●個人の価値観が関係している気がします。図書館には多様な価値観を持つ人が集うわけで，こういうオープンスタジオのような空間に合わない人も当然います。新しい図書館になっても，従来の図書館の「静かな空間」は絶対に排除してはいけない。従来は，にぎやかにやりたい人が阻害されていましたが，この空間が出てくることによって，その人たちのポテンシャルを発揮できるような，多様な場が生まれたことになります。

柴田●にぎやかにやるスタイルには何か名前は付けられていないんですか？

山内●学習については，協調学習という言葉が一般的です。

柴田●何かしっくりこない気がしますね，その名前は。

山内●私もそう思います。この部分については，アカデミックな部分がポテンシャルをすくい切れていません。言葉や概念を作らないといけない時期に入っています。

多様な空間の必要性

柴田●山内先生のエッセーの中に，「イノベーティブなことは，1人の独創的な天才がやっているというよりは集団の力である」というのがありました[1]。そういう天才とか卓越した将軍のような存在を，こういう空間は拒否しているということはないでしょうか？ある種の空間タイプとか場所は，思想の内容まで選択している…。

山内●それはそのとおりだと思います。

柴田●たとえば，独裁的な思想を拒否する空間。

山内●この空間スタイルは，まさにメディアメッセージです。

柴田●空間というのは，従来考えられていたよりももっと強い力を暗黙のうちに働かせている感じもします。

山内●グループ・ジーニアスの話は，最近，ソーヤ（Sawyer,R.K.）という認知科学者が言い始めていることです。一人で生んでいるように見えても，実際には，その後ろ側にコミュニケーションとかネットワークがある。その一部では，こういう空間は機能すると思いますが，やはり多様性が必要です。こもったり，隠れたりする空間も必要ですね。東大には，古い建物の下などに洞窟みたいなところが沢山あります。そういうところで，ボーっとしていることも大事です。

柴田●そう言っていただいて，少し安心しました。洞窟型というか独居型のようなタイプの思考は必要だと思いますが，これは何と名づけられていますか？

山内●型ではありませんが，「リフレクション（内省）」と呼ばれています。「コラボレーション（協調）」とセットの概念です。この2つの往復運動が必要です。ただ，このオープンスタジオのような場所でも，空間とは関係なく，一人になれたりします。一人かどうかは必ずしも空間の型とは一致しません。洞窟の中で過去の偉人と対話しているということもあるかもしれませんね。

柴田●空間に促されたりするけれども，決定はされないということですね。

山内●そうです。その自由は奪えません。重要なのは，教育を洗脳にしてはいけないということです。選択の自由は学習者にあって，この空間が嫌いだったら行かない自由を担保しなければならない。そういう意味でも，多様性も必要なのだろうと思います。

柴田●話はそれますが，先生が書かれたMITにあるバーの話[2]の中で「ため」が重要と書いているのを読んで感激しました。カフェの次に作るのはバー，と思ったくらいです。金大でできるか分からないんですが，大人の雰囲気のある研究者が，人生やら自分

[1] http://blog.iii.u-tokyo.ac.jp/ylab/2011/03/post_293.html
[2] http://blog.iii.u-tokyo.ac.jp/ylab/2011/05/post_302.html

の研究やらをしゃべっている大人の空間。図書館に若い学生さんが沢山来ていいんだけれども，苦み走った部分も欲しいなと，密かに思っているんですよ。
山内●よく分かります。これも空間の多様性の一つですね。異質な人や文化との葛藤があるから面白いんだと思います。

ラーニングコモンズ内サポートデスクの難しさ

柴田●1年間経って図書館は大分変わりましたが，「ここはこうした方が良いのでは？」というところはないですか？
山内●金大には限りませんが，ラーニング・コモンズ（LC）のサポートデスクは難しいですね。LCの学習支援をどう考えるかという本質的な問題に関わる点です。日本のLCは，アメリカのLCを直輸入しています。アメリカの場合，チュータリングの専門性を育成する仕組みが多数あり，サポートデスクがうまく展開していますが，日本では，いきなり図書館員が学習支援のことをやらないといけなくて，どうすればよいのかわからないというところがあります。

日米では狙っている学習が違うので，LCも違ってもいいのかなとも思っています。日本のLCは，みんなでわいわい話しながら何か出来ればいいよね，という形になっています。自主的に発生した研究会を間接的に支援する形でサポートデスクが動くようにするというのが日本型の支援の形として考えられるのではないかと思います。
柴田●金大の場合も，要求があまりなく，こちら側で頑張っても，それほど必要とされていないという感じです。
山内●日米で評価システムが違うのも大きいですね。アメリカの大学の場合，途中で落とされてしまい，進級しないと卒業できないというプレッシャーが大きいので，お金を出して家庭教師を雇ってでも勉強しなくては，という人が多いようです。これをパブリックサービスで行わないとまずいだろうということで，そういう話が出てきました。
柴田●日本の場合，そういうサービスを欲しがっているのは，留学生なんじゃないかと思います。その意味で，留学生に特化したサポートデスクもいいんじゃないでしょうか。
山内●その逆も考えられます。近年，どんどん国際会議で発表して，国際的な業績を増やさないといけないというプレッシャーがありますが，どうやって英語の論文を書けばよいのかについてのサポートがなく，みんな苦労しています。留学生には英語のできる人が多いので，そういうところで日本人学生と留学生が相互に貢献できる仕組みを作ってあげると，非常に面白いことができると思います。
司会●先ほど，この部屋でも，実際にそういうことをやっている人たちがいましたね。
柴田●留学生はこれから増えることはあっても減ることはないと思うので，そこにターゲットを絞ってやるというのは，一つの方法だと思います。

電子図書館時代の図書館員の専門性

柴田●先ほど，図書館が大学教育の中心という話題が出ましたが，実は，大学図書館員については危機的な状況にあり，外部委託をしてどんどん人を減らしましょうという話もあります。変えられない部分というのは，昔から言われているような専門性の部分ではなく，大学教育へのコミットだと思います。つまり，教員自身やらなくてはいけないと思っているけれどもやりたくない，やっても下手だといった部分に図書館員が食い込み，大学になくてはならない機能として存在してしまう。図書館員が教育のベースの部分，基礎になるしっかりした部分を教え，我々はそのあとの専門的な部分を連携しながらやっていく，というような形でraison d'etre（レーゾンデートル：存在理由）を確保しないと，図書館員の生き残りは難しいのではないかと思います。
山内●本質的に図書館の果たしてきた役割で大切なのは，本を人に使ってもらうことだと思います。人の記憶を焼き付けたものである図書館がさらに新しい知を生み出す行為に役に立つ「情報と人をつなぐ」ということが図書館員の本質的な専門性だと思います。それが，人と人をつなぐことにも拡張され，大学の中心になる。これらを支えるための専門性という風に再定義する必要があると思います。

この10～20年，すごい転機に来ています。学内会議でもお感じになると思いますが，理系の人たちは「全部電子ジャーナルでも良い。テキストも別に紙じゃなくてもいいんじゃない」と思い始めています。本が大分減ってきて，本と電子媒体と人の3つの要素がある場合に，これらをどうつなげて知を生み出すのか。文化として蓄積する行為をどう支えるか。そういったことを考えるのが図書館の役割になるでしょう。そのためには，本を見るのではなく，人を見るように図書館員がならないといけないと思います。
柴田●専門性として，何が本当に必要にされているかを考え直し，新しく作り出せる時期とも言えます。
山内●面白い時期ですね。いろんな形を試行錯誤できます。
柴田●これが専門性の新しいパラダイムである，と言うつもりはないのですが，自然科学系図書館の方で環境学コレクションを作り始めています。環境学

というのは，正直いって中身がないようなジャンルです。どういう本を選ぶかということについては，最終的にはそこを使って，どう環境学の内容を伝えられるかといったことと関連すると思います。情報の部分と人の部分との間をうまくつなぐことができれば，これまで名ばかりで実態がなかった「サブジェクトライブラリアン」，この人を新たにこのコレクションに付けてくださいね，といった方向に展開する余地もあると思っています。教育をいかに担うか，ということがないと図書館員もこれからはつらいでしょう。

超未来の大学は「図書館附属大学」？

山内●話は少しずれますが，今回の大震災で分かったのは，理系についても，社会と無縁ではいられないということです。専門情報に電子的にアクセスできるだけではダメで，それらを複合的に広げて，多様な人たちとつきあえる何かが必要です。その視点を理系の図書館に持たないといけないと思います。先程の環境学もそうだと思いますが，単なる電子窓口じゃないものが付け加わらないと，図書館のいちばん大切な文化的部分が抜けるようで，恐い気がします。

柴田●やはり，図書館にも「ため」があるんだろうと思います。いろいろなジャンルの人がいることが図書館の持っている「ため」であって，そこをうまく生かしているかどうかが大学の力だと思います。本当のことを言うと私の図書館の最終的イメージは，「大学がなくても存在する図書館」です。今は「大学に必要とされる図書館」なんですけれども，最終的には「大学を必要としない図書館」。それ自体として地域や社会から必要とされる図書館ですね。

司会●大学図書館というネーミングでなくなりますね。

柴田●逆に大学は，「図書館附属大学」でしょうか。

山内●大学そのものの位置づけも，変わり続けるだろうなと思います。今までのカテゴリーだと大学ではなかったものが大学になってきたりします。知を生み出すサロンが大学のコアでその他は大学でなくなってしまう可能性も十分あると思います。今は，「ウソだろ？」ということが結構起きてしまうので，「超未来」的に言うとありうるかもしれませんね。

（編集担当：情報サービス課　橋　洋平）

【文献紹介】
学びの空間が大学を変える
／山内祐平編著．ボイックス，2010（中央図書館377.17：Y19）

自然科学系図書館　環境学コレクション　OPEN!

◆「環境学コレクションおよびAVブース公開記念式」の開催

4月26日，自然科学系図書館で，「環境学コレクションおよびAVブース公開記念式」が行われました。

式典では，櫻井勝情報担当理事の挨拶の後，柴田正良附属図書館長がコレクションの説明を行いました。次に，笠井純一共通教育機構長から本学の環境教育の取組みについての紹介があり，式典に続いて，今回併設されたAVブースで視聴覚資料のデモンストレーションを行いました。

◆環境学コレクションとAVブースの利用

環境学コレクションは，本学の中期目標・中期計画で掲げている，学士・修士一貫の環境教育プログラムの基本資料とするために，国内外の環境に関する資料を集めたコーナーです。蔵書数は，現在900点を超えました。学習資料としてだけではなく，広く環境について考えるきっかけとしてもお役立てください。

また，AVブースでは，環境学に関する映像資料を視聴することができます。映像を通して，環境学についての理解をより深めてもらえればと思います。AVブースを利用するときは，学生証（職員証・図書館利用券）が必要です。詳しくは自然科学系図書館カウンターでお尋ねください。